

演題名; MDS-UPDRS と UDysRS 日本語版の作成を通して学んだこと

氏名; 武田 篤

所属; 国立病院機構 仙台西多賀病院

要旨

パーキンソン病の国際標準評価スケールとなっている MDS-UPDRS とジスキネジアの国際標準評価スケールである UDysRS の日本語版作成とそのバリデーションを行った。この経験を通して、ヒトを対象とした評価スケールは必然的に言語・背景文化等々の意図せぬ影響を受けること、評価スケールの翻訳にあたっては妥当性の検証が必須であることを改めて確認できた。MDS のバリデーションのプロセスには、順翻訳と逆翻訳による検証、少人数(~ 10 名) を対象とした認知デブリーフィングによる理解度の検証、大規模(数百名) な調査データによる因子分析、の三段階のステップが実施されている。一般的にはのみ、または + でバリデーション済みとされることが多いが、より厳密にはまでチェックをすることが望ましいと考えられた。

A. 研究目的

パーキンソン病の国際標準評価スケールである MDS-UPDRS とジスキネジアの国際標準評価スケールである UDysRS の日本語版作成とその言語バリデーションを行い、翻訳の妥当性について検証した。

B. 研究方法

MDS の基準に沿って、以下の 3 ステップによる言語バリデーションを行った。

順翻訳と逆翻訳

少人数を対象とした認知デブリーフィング

多施設共同研究による大規模調査を行い、評価結果の妥当性を因子分析により検証

(倫理面への配慮)

実施した各施設に於いて、倫理委員会による承認を受けた。

C. 研究結果

MDS-UPDRS 日本語版について ~ のステップを実施した。については 2012 年 6 月 1 日から全国 30 施設の参加を得て、365 例のデータ収集が行

われた。因子分析による解析結果は日本語訳の妥当性を支持するものであった。

UDysRS についても同様にバリデーションが実施された。については全国 25 施設の参加により、253 例のデータ収集が行われた。因子分析による解析結果は日本語訳の妥当性を支持するものであった。

D. 考察

MDS-UPDRS と UDysRS ともに日本語版が確定し、広く臨床研究に用いられている。本研究を通して臨床評価スケールの翻訳に於ける言語バリデーションの重要性を改めて確認できた。

E. 結論

臨床評価スケールの日本語訳作成にあたっては言語バリデーションの実施が不可欠である。

F. 文献

Kashihara K., et al., Mov Disord Clin Pract.1: 200-212, 2014.